
AQUARIUS

金田一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AQUARIUS

【Nコード】

N1125U

【作者名】

金田一

【あらすじ】

この世の陰には謎の生命体「AYAKASHI」が蠢く・・・。

少年時代、AYAKASHIと謎の男の襲撃で両親を失った男がいた。名は、マリウス・コールデン。

左目に「神の眼」を持つ。

両親が殺された理由はこの「眼」が原因だった。

その眼を奪おうと数多のAYAKASHIと両親を殺した謎の男が

襲いかかる。

男の正体は一体何か？

真の目的は？

世界はこのままAYAKASHIに乗っ取られるのか！！

ダークファンタジー今始まる！！！！

「プロローグ」

「お母さん、『AYAKASHI』って何？」
少年は母親に聞いた。

「え？どうして？」

「お父さんがよくおじさんに『AYAKASHI』がどうのって話をしてるから何となくね。日本じゃ妖怪のことを『アヤカシ』っていうみたいだけど、どう違うの？」

母親は少し考えて言う。

「『アヤカシ』と『AYAKASHI』は全然違うの」

「どう違うの？」

また母親は考えて言う。

「『AYAKASHI』についてはあなたが大きくなったら解るかも知れないわよ」

「えー！？」

するとドアが開く音がする。

父親が帰ってきたのだ。

「お父さん、お帰りなさい！」

「あら、レオ！おかえりなさい！」

「ただいま、ローレル、マリウス。2人ともいい子にしてたか？」
母親は笑って言う。

「私とこの子はずっといい子でいるわよ」

「そうかそうか。マリウス、お前にいい物をやろう」

「えー？なにになに？」

「この前ペンダントがほしいと言っただろう？だからそれだ！」
父親が箱を差し出すと、少年はうれしそうに受け取った。

「やったー！」

箱を開けると、ダイヤモンド型をしたクリスタルが付いているペンダントが入っていた。

「わお、シンプルな形してる」

「気に入ったか？」

「うん！ありがとう！！」

少年は父親に抱きついた。

「あらあら、よかったわねえ」

「今度、君の分も買ってくるよ」

「ありがとう」

少年がペンダントをつけようとすると、父親は言った。

「マリウス、少しだけママと2人だけにしてくれないかい？」

「それって大人の事情？」

「うわ、いろんな意味で当てられた」

「わかった。これは部屋でつけるよ」

少年は階段を駆け上がって自分の部屋に入るなりベッドの上に飛び乗った。

箱を開けてペンダントを取り出してみると、不思議なことにクリスタルが青く光っている。

「すげー。赤く光らないかな？」

そういうと今度は赤く光った。

少年は不思議なクリスタルにすっかり魅了されてしまった。

数分後、下の階からものすごい音が聞こえた。

すると、母親が血相を変えて部屋に入ってきた。

「マリウス！来なさい！」

少年はペンダントをつかんだまま急いで母親のところに行った。下から銃声が聞こえ、父親が母親に叫んだ。

「ローレル！早く逃げろ！狙いはマリウスだ！」

2人は階段を駆け下りた。

少年は父親の方を見ると、犬のような生物と闘っていた。

「行け！俺の事はいい！」

犬は父親に飛びついた。

「うわ！」

父親の姿が物陰に隠れてしまった。

「お父さん！」

「早く来なさい！」

玄関のドアを開けると、目の前には犬のような生物が5匹いた。

「うそ・・・待伏せされてた・・・」

少年は母親の後ろに隠れた。

敵はゆっくり近づいてくる。

母親は叫んだ。

「この子に手を出さないで！」

敵はお構いなしに近づいてくる。

「マリウス、逃げなさい！」

「え！でも・・・」

「いいから早・・・」

敵が母親に飛びつき、辺りに血が飛び散る。

その血は少年の頬にもかかる。

少年はショックのあまり足がすくんでしまった。

敵は少年のほうを見て牙をむき出し、近づいてきた。

が、そのとき。

「やめろ、その子には手を出すんじゃない」

犬のような生物はその声を聞くなり動きを止めた。

敵の後ろからフードを被った男が出てきた。

男は少年に近付いた。

「やあ、坊や。ごめんよ、本当はこんなことはしたくはなかった。

俺の『AYAKASHI』は気性が荒すぎてね」

男は少年の目と握っているペンダントを見た。

「君は『あいつの目』を持っているし、しかもそのペンダントまで持っている。今日君を連れて行こうと思ったがまた別の機会にしよう」

少年はおびえた目で男をじっと見つめた。

男は白い肌に赤い目だった。

「そうだ、これだけ教えておこう。君は神に近い存在なんだからな」

家の中から血だらけの『AYAKASHI』が出てきたと思いきや、急に灰に変わって崩れてしまった。

すると『AYAKASHI』が出てきたところから銃を持った男が現れた。

「その子から離れろ」

フードの男は彼を見るなり大声で笑いだす。

「またお前のお出ましか。まったく・・・　つまらないな！」

「きさま！よくも弟を・・・」

「あ、あの男はお前の弟か。弱いもんだな」

「今日こそケリをつけてやる」

「ケリだって？つけられるもんなら」

男は右手を前につき出した。

「つけてみる！！」

銃を持った男は後ろに吹き飛ばされて、壁に打ち付けられてしまった。

男は手を下し少年に向き直る。

「そのペンダントは君の目の真の力を封じるためのものさ。またいつか会おう！」

男はそのまま消えてしまった。

銃を持った男が起き上がって少年を呼んだ。

「マリウス、マリウス！大丈夫か？マリウス！」

少年は我にかえって、銃を持った男のほうを向いた。

「ジョセフおじさん・・・」

少年の目には涙があふれ出ていた。

「第1章 マリウス」

13年後・・・。

彼は暗い部屋の中で座っていた。

すると、ポケットの中にある携帯電話が鳴る。

「こちら本部。コードネーム「アクエリアス」、1匹のAYAKASHIが4人も襲って逃げたという連絡が入ったわ」

「コードネームで呼ぶのはやめてくれないかな。なるべく本名で呼んでほしいんだけど」

「わかった、マリウス。あいつが逃げた場所は言わなくてもわかる？」

「ああ、さつき目を瞑ったら見えた。そのAYAKASHIって、人型、性別は女で夜しか出歩けないやつだよな？」

「大正解。さすがね。そいつってなんかヴァンパイアみたいね」

「言ってる。でも、AYAKASHI自体がもうヴァンパイアだろ」

マリウスは車に乗りサングラスをかけて目を瞑る。

そして現場へ向かった。

AYAKASHIが逃げた場所は古びたバーだった。

たくさんAYAKASHIと人間がいるが、マリウスにはどれが人間かAYAKASHIかすぐに見分けがついた。

「ちよつと、そこのお兄さん」

後ろから若い女の声がする。

サングラスを外して女を見た。

その女が4人も殺したAYAKASHIだとわかっていた。

「一緒に1杯飲んだ後に奥の部屋で楽しい事しない？」

「いいね。そうしよう」

2人はカウンター席に座った。

「俺は車で来たから水を頼む」

「あら、以外にえらいのね。わたしはワインね」

「飲酒運転はしたくないからね」

女はワインを飲むとマリウスを見て言った。

「あなたの目は綺麗ね。欲しいくらいだわ」

「よく言われる」

女は全部飲み干すと爛々と目を輝かせた。

「さて、奥へ行きましょう」

「そうだね、楽しみだ」

奥に進むと薄暗い廊下に出た。

そのまま真っすぐ進むと、部屋がたくさんある。

どの部屋も薄暗い明かりがついている。

ドアが少し開いている部屋をのぞくと、その部屋には血が広がっていた。

おそらくここにある部屋は全部人を襲うためにあるのだろう。

「少し気味が悪くないか？」

「気のせいよ。いつもこんな感じ」

奥の部屋に入ると、血飛沫のようなシミが広がっている。

「いつもこんなに血生臭いのか」

「そうよ、楽しみつつてその事よ！」

女は口を大きく開くなり爪を立てて彼を襲い始めた。

すばやくかわして銃を取り出した。

中には銀の弾丸が入っている。

「今日4人も襲っておいで、よくそんなにのうのうといられるもんだな」

マリウスは1回瞬きをした。

すると、左目の瞳が茶色から赤に変わった。

女は左目を見るとひるんだ。

「『ゾディアック』！そうか、あんたが！」

女の胸めがけ弾丸を放った。
女は灰となって崩れ落ちる。

騒動を聞きつけAYAKASHIが3人部屋に入り込む。

「『ゾディアック』を捕まえろ!!」

「全く、暇なやつらだな」

AYAKASHIどもが襲い掛かるとマリウスは窓から飛び降りて
見事に地面に着地した。

下から銀の弾丸を浴びせる。

やつらは即座に灰となった。

今度は後ろから襲い掛かってくる。

また瞬きして瞳の色を赤から黒に変え、一瞬にして姿を消した。
いや、姿を消したというより闇と同化したと言えればいいだろう。
そのままバーの中に入り姿を現す。

辺りを見回すともぬけの殻となっていて真っ暗だ。

「ちっ、油断したかな」

後ろから影のような物が彼を襲い始めた。

おそらく影型のやつだろう。

マリウスは瞳を黄色に変えて身に着けているペンダントを外し、上
にかざした。

すると、ペンダントが一瞬のうちに光を放つ。

影型のAYAKASHIは一瞬のうちに消滅した。

ポケットに入っている携帯電話を出して本部に電話をかけた。

「こちら『アクエリアス』。先ほど4人襲ったAYAKASHIを
退治した」

「よう!いつもコードネームで呼ぶなと言ってるお前がコードネー
ムで名乗るとはなあ!」

オペレーターの声ではなく、聞き覚えのある男の声が聞こえる。

「おじさん!?何やってんだよ!!」

「いや、ちょっとやってみたくてね。そっいえば人型以外のやつも

いたのか？」

「ああ、影型のやつに襲われた。光を放ったら一発ドカンさ」

『詳しい話は本部で聞くから早く着なさい』

「わかった、すぐ行く」

バーの表に止めた車に乗り本部へ向かった。

「第2章 事の始まり」

彼が特殊能力を身につけたのは16歳の時だった。

ある晩、マリウスは伯父のジョセフの仕事の手伝いをしていた。

「マリウス、その赤い封筒に入っている書類を取ってくれないか？」

「わかった」

彼は赤い封筒を持ったとたん、中に入っている書類の文字がはつきり透けて見えた。

慌てて封筒を裏返したが、封筒には何も仕掛けはない。

「どうした？」

ジョセフは心配そうに話しかける。

マリウスは我に返った。

「いや、何でもない・・・」

封筒を渡して本棚から本を一冊出し、表紙を見つめた。

やはり中身が読める。

「何だこれ・・・」

不意に声に出して言うジョセフはマリウスの方を見た。

「マリウス」

「何？」

「俺の心が読めるか？」

マリウスはわけがわからなかった。

「何でそんな事言うんだよ？」

「何となくだ。できるか？」

「わかった、やってみる」

そうしぶしぶ答えて目を瞑る。

周りの音が何も聞こえなくなった。

目の前に文字が浮かぶ。

大丈夫か？サツキカラ様子ガオカシイゾ

目を開くと自分はヘトヘトになって座っていることに気がつく。

「大丈夫か？」

「ああ、読めたよ。『大丈夫か？さつきから様子がおかしいぞ』だろ」

「ご名答。何かあっただろ、言ってみなさい」

「信じてもらえないと思うけど言うよ。実は昨日の夜から透視ができるようになったんだ」

「なぜそれを早く言わなかった！」

マリウスはうつむいた。

「ごめんなさい。それだけじゃない、夜目も利くようにもなったし、それに今は人の心も読める様になった。俺の目に何か関係あるのか？」

ジヨセフはため息をつく。

「そうだな。その事については説明していなかった。お前の左目を『神の眼』と呼んでいる。お前が産まれた時に、親父が言っていたんだ。『私は昨日夢を見た。それは男が私に「私の片目を持つものがもつすぐ産まれる。この子はきつと「あいつ」から命を狙われる羽目になるが、人類の希望になる。もしも眼がAYAKASHI達の「あいつ」の手に渡ってしまったら世界は破滅する」私は男にお前は誰かと説いた。『私はこの世界を創った神。「あいつ」というのはAYAKASHIを創った神だ』と言って男は私にある物を渡して消えた。何にせよ、すべてこの子の運命にかかっている』と」

マリウスは立ち上がる。

「ある物ってこのペンダントのこと？」

黙ってジヨセフがうなずいた。

「そうだ。それが何なのか全くわかっていない・・・」

「でも待てよ、あいつは『このペンダントは眼の真の力を封じるた

めのものだ』と言ったな。それってなんだろう?」

「その事は今度考えよう」

マリウスは部屋に戻り窓の外を見つめる。

1匹の野良犬が歩いている。

「あの犬、2足で歩かないかな?」

面白半分に言うとな本当に2速歩行をしてみた。

「うわ、ヤバイ!今度は操るのもできちゃったよ!4足出歩け!」

そういうと何事もなかったように4足で歩き始めどこかに行ってしまった。

「なんてこった、俺はどうやって生きて行けばいいんだ・・・」

一人で悩んでいるとドアをノックする音が聞こえたので、ものすごく飛び上がってしまった。

「どつどつどど、どうぞ!」

入ってきたのはジョセフだった。

「どうした?大丈夫か?」

「一応・・・」

ジョセフは椅子に座った。

「マリウス、言っておきたいことがある」

「何?」

「死者を甦らせたいと思ったことはあるか?」

「あるっちゃあるけど・・・」

「それを考えていたら、とんでもないことが起きるかもしれないからやめなさい」

「それを言いに来たの?」

「一応な。そしてもう一つ、あまり力を使うな」

「だよな、わかってるって」

「だといいがな」

ジョセフはマリウスの目を急に覗き込んだのでマリウスは驚いた。

「何!?!」

「あ、いや、なんでもない・・・」

そのままジョセフは何かを考えたまま部屋を出てしまった。
マリウスはわけがわからなかった。

『おじさんは何が言いたかったんだ・・・？』

そう思いつつベッドに横たわる。

少年は花が咲き乱れている野原に立っていた。

「ここはどこだろう・・・」

あたりを見渡すと、小さく動くものを見つけた。

走ってそれがあるところに行ってみると、白い服を着た若い女性が歩いていた。

女性は少年に気づいたが、そのまま走り去ろうとしよう。

「待って！」

急いで追いかけたが、女性は急に止まって少年の方を振り返る。

彼女は悲しそうな顔をしていた。

「あなたは誰？」

少年は問うと、彼女は口を開いた。

『わたしは・・・』

すると、

「マリウス！！！」

大声がどこから聞こえたのでマリウスは飛び起きた。

ちえっ、後もう少しだったのに。

でも、少し経つと嫌な予感がする。

前に感じたあの感覚・・・。

そう、AYAKASHIの気配だ。

窓の外を見ると、前に見た犬の様なAYAKASHIが、家を囲んでいるのだ。

「まさか・・・」

マリウスはとつさに部屋のドアを開け、下に降りた。

ジョセフはライフルを持って玄関の前に立っている。

マリウスが後ろにいることに気づき、ジョセフは小声で言った。

「マリウス！ここにいてはいけない！逃げろ！」

「何でだよ！」

「あいつはお前が力を使ったのに気がついたんだ！」

「え！？」

わけがわからなくなったマリウスは、力を使おうとする。

それと同時にAYAKASHIが窓を割って入ってきた。

「なんてこった・・・」

「気をつける！」

マリウスの後ろにいたAYAKASHIをライフルで撃つと、たちまち灰へと変わっていく。

撃つても、撃つてもまだ出てくる。

「くそ！キリがない！」

ジョセフはそう吐いたが、自分の後ろにいたAYAKASHIにはまったく気づいていなく、AYAKASHIはジョセフに飛び掛った。

「うわ！」

この瞬間を見てしまったマリウスは、過去を思い出してしまった。父親が殺された瞬間を・・・。

「やめろおお！！！」

マリウスが叫ぶと、ペンダントが光を放ち、左目の瞳の色が茶色から黄色に変わった。

そして、あたり一面強い光に包まれた。

光が弱まり、ジョセフはあたりを見渡すと、AYAKASHIは全部灰と化していた。

マリウスを見ると、彼は放心状態のままずっと立っている。

左目に目をやると、瞳はまだ黄色のままだった。

「大丈夫か、マリウス！」

マリウスは我に返った。

「俺は何をやった・・・」

「えっと・・・」

ジヨセフが言いかけると、瞳の色が茶色に戻り、マリウスは力なく倒れた。

少年はまた野原に立っていた。

目の前にさっきの女性が立っている。

「あ、あの・・・」

『ごめんなさい、あなたを危険にさらしてしまった・・・』

「え!？」

彼女は少年のそばに寄った。

『私はシェイラ。あなたの眼を守ると誓った者』

強い風が吹くと同時にあたりが暗くなり、彼女は話を続ける。

『あなたは思った以上に力が強すぎる。いつか暴走してしまうかもしれない。あなたの運命はAYAKASHIを創る者を消すこと。

ただど彼はどんどん力を増してゆき、今は手に負えないほどになっている。彼はあなたの存在に気づき、力を利用しようとしているの』

「そいっつてもしかして・・・」

彼女はうつむいた。

『そう、あなたの両親を殺したやつよ』

「やつぱり・・・」

少年はショックを受けたが、少し疑問を持っていた。

「ずっと思ってたんだけど、AYAKASHIっていったい何なの？おじさんとかに聞いてもあまり教えてくれないんだ」

彼女は少々戸惑った。

『AYAKASHIは魂を持っていない生き物。魂があるものを襲い、血液や心臓、脳、そして魂などを食らい、何10年いや、何100年も生きることができるものもいる』

「弱点はもしかして、銀？」

彼女はうなずく。

「そっか、だから父さんの部屋に銀が入ってる容器があつたのか」

『中には鉄が弱点のやつもいるけど、ほとんどが銀が弱点よ』

「へえ〜。そういえば、あいつを倒さない限りA Y A K A S H Iは全滅しないの？」

『そう、でも・・・』

「でも？」

彼女は後ろを向いた。

『何でもないわ。また今度にしましょう。あなたと話ができてうれしかったわ』

「え！？待ってよ！！」

『さようなら』

彼女はすうつときえてしまった。

マリウスは目を覚ました。

「お、やっと覚めたか」

いすに座っていたジョセフは立ち上がり、マリウスに近づいた。

「具合はどうだ？」

マリウスはため息をついた。

「まだ少し混乱してる」

「そっか、ならもう少し寝てなさい」

「わかった」

少し立つとマリウスは眠りについた。

窓の外に1匹のカラスがいた。

カラスはマリウスが眠りについた後、羽音を立てて飛び去り、フィドをかぶった男の方に止まった。

「やはり、あの子はまだ力をコントロールできていないか・・・。
まあいい、時が来れば別だがな」

男は静かに暗い夜道から消えた。

「第3章 ルラ」

話を戻し、マリウスは本部へ向かっている途中、道端に倒れている黒い大型犬を見つけた。

マリウスは車を止め、犬に近づくと、犬は前足を怪我をしていた。こうしてはいられないと思い、マリウスは犬を車に乗せ、本部で手当をすることにした。

犬ははじめはおびえていたが、少しすると安心して眠ってしまった。

やがて本部に着いた。

本部とはAYAKASHI退治専門組織「LIGHT FORCE」の総本部のことである。

犬を抱き上げ伯父のジョセフがいる局長室へと向かった。

「ようマリウス、その犬はなんだい？」

後ろから声がしたので振り返ると、幼馴染のライリー・ケイマンがいた。

彼は若くして研究開発部の部長である。

「ここに向かう途中、足を怪我して倒れていたんだ」

ライリーは近づいた。

「へえ、かわいい犬だな。お前の『眼』の力とやらで治せるか？」

「治せなくはないが、がんばってやってみるよ」

「そっか、がんばれよ！」

ライリーはマリウスの肩を叩いた。

ライリーと別れ、マリウスはエレベーターに乗り、犬に目を移した。

『この犬、普通の犬じゃないな・・・』

そう思いつつエレベーターから降り、局長室へと向かう。

局長室のドアをノックし、部屋の中に入ると誰もいなかった。

『あのオヤジ、またどこかほつついてやがるのか・・・』

と心の中で思いながらドアを閉めた。

ソファの上に犬を寝かせ、怪我をしている前足に手をかざす。

マリウスの左目の瞳の色が青へと変わり、同時に傷も癒えていく。

「よし、これで大丈夫だろう！」

そう言うのと、犬は「クウン」と鳴いた。

5分ほどすると伯父ジョセフが入ってきた。

「あ、いたのか」

と、ジョセフが言うのと、

「いたのかじゃない！どこ行ってたんだよ！」

とマリウスはつつこんだ。

「だって、暇なんだもん」

「言うと思った・・・」

ジョセフはソファで寝ている犬を見た。

「で、あの犬は？」

「足を怪我して倒れていたんだ」

すると犬はくしゃみをしたと同時に、炎を噴いたので、床が少し

焦げてしまった。

「ええゝ！？何事ゝゝ！？」

「やっぱり普通じゃないと思った・・・」

犬はむくつと起き上がり、後ろ足で頭をかいた。

『ごめんね、驚かせちゃった？』

と、犬は言った。

「しゃべった！！！？」

『うん、しゃべれるよ。私はルラ。死後の世界の番犬なの』

2人はわけがわからなかった。

「で、何で君がこの世界にいるんだい？」

ルラは下を向いていまう。

『実は言うと、つれて来られたの。実験台として・・・』

「実験台だって!？」

マリウスは驚いた。

「で、どんなやつに連れてこられた？」

とジョセフ。

『えつとね、確か、肌は白くて、赤い目をしていて、黒いローブを着ていた男』

マリウスとジョセフの顔が一気に真っ青になった。

『どうしたの？あの人知ってるの？』

「ああ、俺の両親を殺したやつだ・・・」

『そうなの・・・。お気の毒に・・・』

「どうやってやつから逃げ出した？」

『すきをねらってがむしゃらに逃げ出した。友達も一緒に逃げただけど、はぐれちゃった・・・』

「友達？」

『うん、さっき私は死後の世界の番犬だって言ったでしょ？私は地獄、あの子は天国を守ってるの』

「その友達つてのも犬なのか？」

『犬じゃないよ。また別の動物よ。見れば絶対わかる』

「見ればわかるって・・・。で、君はこの後どうするの？」

『帰りたいけど、帰り方がわからないからなあ・・・。しばらくこの世界にはまだいるよ。でも、居場所がないの・・・』

「じゃあ、君はこいつといればいいんじゃないか？」

ジョセフはマリウスを指で指す。

「何でだよ！俺だってあいつに狙われてる!!」

『しばらくの間だし、たぶん大丈夫だと思うよ』

「でも・・・」

ルラはマリウスの足に擦り寄ってきた。

『お〜ね〜が〜い〜い〜い〜!』

マリウスはため息をつく。

「わかったよ・・・」

「決まりだな」

『やった〜!』

「よし、一旦家に行こう・・・」

局長室を出てマリウスとルラは車に乗り、マリウスの家へ向かう。

ルラはずっと窓の外を見ている。

「友達を探しているのか？」

『うん・・・』

「明日になればたぶん見つかるんじゃないか？」

『だいいけど・・・』

家につき、家の中に入った。

「さてと、君はどこに寝る？」

ルラはテレビの前にあるソファを指差す。

『あそこのソファがいい』

「ソファでいいの？」

『うん。あの大きさで十分だもん』

「あそう、じゃあ俺は2階にいるよ」

『じゃ、おやすみ〜』

ルラがソファの上で寝たのを確認した後、マリウスは自分の部屋に戻り、ペットの蛇のファリスにエサを与え、ベッドに横たわった。

「第4章 夢」

「ほら、早く来なさい」

少年は早足で両親の方へ行く。

だが、少年の腕を誰かがつかむ。

それは白い肌で赤い目をした男だった。

「お父さん！お母さん！」

両親の方を見ると、2人は大型のAYAKASHIに襲われかけていた。

男は少年にささやく。

「君は俺から逃げられない」

少年は必死で振り払おうとする。

「いやだ！離して！」

少年はまた両親の方を向こうとしたその時。

グシャ！

という音とともに頬に生暖かい血がかかり、マリウスは叫んだ。

「やめろおおおおお！！！！」

マリウスは目が覚めた。

「またかよ・・・」

時計が午前10時を指している。

汗だくになってることに気づき、階段を下りバスルームへ向かうが、なぜかテレビがついている。

おかしいと思い近づいてみると、黒い服を着た黒髪の少女がテレビを見ていた。

「え！？」

少女はマリウスに気がついた。

「あ、おはよう！マリウス！」

「誰？」

「あ、これじゃわかんないよね。私、人間になれるんだ」
マリウスはやっとわかった。

「ルラ？」

「うん！」

「でもどうして俺の名を知ってる？昨日教えてなかったろ？」

「そうだった、言うの忘れてた。あつちの世界じゃあなたのことを知らない人はいないよ」

「なるほどね・・・」

ルラはマリウスの顔をまじまじと見始めた。

「やっぱり『あの人』に似てる・・・」

「え？」

「なんでもない」

「俺、シャワー浴びてくるよ」

シャワーを浴びながらマリウスはふと思う。

『あの子の世界じゃ俺のことを知らない人はいないだって？しかも

「あの人」って一体誰だ？』

いろいろ考えれば考えるほど、わからなくなる。

『まあいいや、後で考えよう・・・』

数分後、ルラはマリウスに言った。

「お腹すいちゃった・・・」

「え？そうか、じゃあ食べに行くか・・・」

2人は車に乗った。

約10分後・・・。

小さなダイニングの前に車を止めた。

看板に『リッチーズ・ダイナー』と書かれている。

「ここは？」

「ああ、父さんの友人が経営してる店。よくここで飯を食ってる。」

でも、最近は行っていないな・・・」

ドアを開けたとたん、

「マリウスうううううう！！！！！！！！！！」

と赤毛の女性がいきなり叫びながらマリウスに抱きついたので、2人は勢いよく倒れてしまった。

そしてルラは驚いて固まってしまった。

ちなみに誰が抱きついたのかというと、このダイニングのウェイトレスのリンダ・パーカー。

「おはようん！！」

「朝っぱらからテンション高い・・・」

「だって〜！」

店の奥からラテン系の男が出てきた。

彼はこの店の店主のリッチー・バレリアス。

「何だか騒がしいと思ったら・・・」

「あ！店長！久しぶりにマリウスが来ましたぞ！」

リンダの目は爛々と輝いている。

「お前は本当にマリウスが好きだな・・・」

リッチーは呆れ顔だ。

「そんなことより、ほら！仕事！！」

「了解・・・」

リンダは、しぶしぶ店の奥に行ってしまった。

「よっ！マリウス、久しぶりだな！」

マリウスは腰をおさえながら立ち上がる。

「ああ、久しぶり・・・」

「そこにいる子は？」

「あの子について話があるんだが・・・。っと、その前に腹ごしらえさ」

「OK！いつものだな！で、あの子は何にする？」

「私は何でもいいよ・・・」

「そっか。じゃ、おまかせという事で！そうだ、席は特別に、俺の

家の中にしよう」

店のずっと奥、リッチーの家のリビングで食べるようになった。

「じゃ、飯ができるまでここで待ってる」

「はい！」

ルラは元気よく言い、リッチーは厨房へと向かった。

「ルラ、実は言うとも彼もAYAKASHIハンターなんだ」

「へえ」

「AYAKASHIの情報屋とも言われてる」

「なんかすごいかも・・・」

ルラは驚いた。

「ねえマリウス、さっき言った『あの人』の事なんだけど・・・」

マリウスはまさかその話が来るとは思ってもみなかった。

「な、何だい？」

「『あの人』というのは、あなたの前世の人物よ。人物といっても、全能の神様なんだけどね。名はアルディオス」

「はあ！？」

マリウスはあまりつつこめなかった。

ルラは話を続ける。

「彼は天と地、そして人間やいろいろな生き物を創った。彼と対になっている神がいるの。ツイヴォラという悪神。ツイヴォラはいつしかアルディオスの力を奪おうと考え始めた。『最強の生物』を創るためにね・・・」

「まさか、『AYAKASHI』のことじゃないよな・・・？」

「当たり前。でも、力を奪おうとした時、アルディオスは自ら命を絶つてしまい力を奪えなかった」

「はあ。なるほどね・・・」

「て言うかごめんね。食べる前にそんな話をして」

「大丈夫、大丈夫。父さんやおじさんが食べる前に暗い話するから慣れてるよ」

2人は大声で笑った。

と、ちょうどいい具合にリッチーが食事を持ってきた。

「はい、お待ちどう！マリウスにはスクランブルエッグ、嬢ちゃんにはイチゴクレープだ！」

「わーい！でも、クレープって何？」

マリウスとリッチーは一瞬コケかけた。

「え？クレープ知らないの？」

「あ、実は・・・」

マリウスはルラについて語ると、リッチーはなるほどという顔をした。

「へえー、地獄か・・・で、友達は天国ってことか。友達はどんな感じの子なんだい？」

「えっとね、着ている服と髪の色は白。あの子は走ったら早いのかなのって感じ」

「その子は男の子？女の子？」

「男の子よ」

「よっしゃ！その子の手がかりがわかったことで情報を集めよう！

今日は特別に朝飯と情報料はタダにしてやる！！」

その発言にマリウスは驚くしかなかった。

「え！いいのか？」

「いいんだ、いいんだ！何かあったら連絡する。食ったら食器はそのままにしておけよ。じゃ、ごゆっくり」

リッチーは店に戻り、マリウスたちは朝ごはんを食べ始める。

「クレープおいしいかい？」

ルラは首を縦に大きく振った。

「うん！人間界っていいね。こんなおいしいもの食べられるんだもの」

「普段どんなの食べてんだい？」

「えっとね・・・こっちじゃ『ゲテモノ』って言ってる物が多いよ」

「あそう・・・」

二人はあつという間に朝ごはんを平らげリッチーの家から出た。

「あれ？仕事は無いの？」

とルラが言う。

「俺は基本夜間担当なんだ。本部から連絡が来るまで仕事は無いってこと」

「へえ。マリウスはいつも何してるの？」

「えーっと……。図書館とか美術館行ったり、その辺ほつつきまわる事くらいかな？それか本部の研究開発部に行ってる」

「そこ行きたい！！」

まさかそんなことを言うとは思ってもみなかった。

「開発部行きたいの！？まあ、別にいいけど……」

「やったね！」

2人は車に乗り本部へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1125u/>

AQUARIUS

2011年10月9日08時50分発行